Osaka University Knowledge Archive

Title	カスパー・ダーヴィト・フリードリヒ : 視覚と構成の風景画
Author(s)	仲間, 裕子
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46582
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【26】

氏　　名	仲（なか）　間（ま）　裕（ゆう）　子（こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２０５７３　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 18 年 3 月 28 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**カスパー・ダーヴィト・フリードリヒ－視覚と構成の風景画－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　若山　映子 （副査） 教　授　囿府寺　司　　教　授　大橋　良介

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、序章、本文五章、終章（註を含み A4 判 104 頁：400 字×374 枚、資料と文献 7 頁）、別冊図版（A4 判 61 頁と図版リスト、図版出典 10 頁）からなり、19 世紀前半にドレスデンで活躍しながら、歿後半世紀余りの間、諸文献から姿を消していた画家フリードリヒの「風景画」の独創性を論じ、彼とドイツ現代美術の諸相との関係を探るものである。

序章では、フリードリヒの作品を寓意的側面や彼岸・此岸の二元論的立場から論じてきた先行諸研究の再検討と、彼の特異な絵画の再考察の必要性を説き、論文の概略を記す。第一章は、最初に《画家のアトリエからの眺め》二点を取り上げる。ドレスデンはエルベ河畔の彼のアトリエの位置を諸資料に基づいて確定した後、左の窓の外に現われた風景に都市の実景を、右のそれに田園風景の断片と実景の合成（モンタージュ）を指摘して、画家の関心を、ノヴァーリスの断片的な小説と対照しながら、彼の絵画とロマン主義文学の関係を論じる。次いでそれらの前後に描かれた連作、「四季」と、「一日の四つの時」を考察し、共通項として「自己反省的な眼」と「自由なパースペクティヴ」、写生的な断片による構成風景を挙げる。第二章では、彼の代表作とされている油彩による風景画の特徴として指摘されてきた「構成の独創性」、「構築性」、「抽象性」について論じ、そこに「自然と宇宙の構造の解析に幾何学を重視したノヴァーリスの思想」との関係を見ると同時に、フリードリヒの風景画の構図の類型の意味とそこに垣間見える近代的思考を探る。第三章は、彼の風景画が、自然と人間の融合というロマン的な憧憬や伝統的な牧歌的風景画とは一線を画すことを指摘して、同世代のドイツの科学者、哲学者、文学者との関係に注目して、彼の現実逃避的性格を強調する過去の批評の再検討を促し、ナポレオンの侵略と解放戦争の時代を積極的に生きた画家像に光を当てる。第四章では、ドイツ・ナショナリズムの表象装置として企画され 1876 年に開館したベルリンのナショナル・ギャラリーで 1906 年に開催された「ドイツの 100 年展」において「再発見」されたフリードリヒに対する批評とその後の受容の変化、彼がドイツ国粋主義の高揚に利用されていく経緯を辿る。第五章においては、1999 年から 2000 年にかけてベルリンで開催された「20 世紀―ドイツにおける 100 年の美術展」に見られた、現代批評家によるフリードリヒの位置づけを再考し、「メランコリー」、「ロマン的イロニー」論の中でアンセルム・キーファー、ゲルハルト・リヒターらの戦後の活動が展望され、現代ドイツ美術の出発点にフリードリヒを位置づける。終章では、《峡谷の風景》一点のみが現存する「透かし絵」に着目する。それは、ランプの点滅に伴って、同一の画面に異なった光景が現出するような絵画である。その分野では他に、ロシア皇帝近縁の一公爵の依頼の下で制作したことが記録されてはいるものの、実作品の存在が定かでない四場面を類推させる三点の素描、《音楽のアレゴリー》が伝承されている。それらの観察と、失われた原作で

ある「透かし絵」の鑑賞方法に関するかなり詳しい記述とを照合・検証することで、フリードリヒが、照明の色や強さで刻々と変貌する絵画の鑑賞と同時に、彼自身が選んだ楽器による演奏を参列者に楽しませ、視覚と聴覚、体感を刺激する総合的な上演芸術に受け継がれていく新しい分野の開拓を試みていたとして、晩年の画家の貢献を論述する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、今日ではドイツ近代美術の代表者と見なされているフリードリヒの絵画の批評史と受容史とを辿り、ごく初期のセピア画から晩年の「透かし絵」までを観察分析して、彼の中に通底する、現代ドイツ美術にも受け継がれたロマン的イロニー精神を指摘している。写実を旨としていた伝統的な北方の風景画から訣別して、具体的な独自の思想の絵画化のために、実景素描の断片を画面の中心に据えて他の画像との合成（モンタージュ）によって作品を構成し、幾何学的に風景画を組み立てることで観者の視線を画面内で誘導し、しかも自然に対峙する自己の姿を描いた画家フリードリヒ像を、豊富な文献の精読によって論じている。

政治的な思惑からドイツ独自の美術史発掘を意図して 1906 年に開催された「ドイツ 100 年展」を契機として「再発見」された画家が、ドイツ精神の体現者として、ナチ政権下に国粋主義（ナショナリズム）と結び付けられていく過程を探り、近代から現代におけるドイツ美術の受容史を構築的に論じ、日本ではいまだ研究の対象とされていない「透かし絵」に注目して、現代的な上演芸術をも模索していた画家像を浮彫りにしている点に研究の成果が認められる。

申請者は、第二次世界大戦後のドイツ美術研究に長年携わってきたが、その過程において、時代を遡って再検討する必要性を感じ、しかも上述の回顧展に出合ったことから、勤務校でのサバティカルを利用してベルリンを中心に欧州各地で調査研究を実現し、デューラーら 16 世紀の絵画の後、ドイツ的な美術が見られなかった衰退期とも言える 19 世紀初頭にあって、フリードリヒがいかにして独創的な風景画を描くに至ったのかを探るために、同時代の科学、哲学、文学にも関心を広げて、作品論に積極的に取り組んだ。但し論述の展開や論文の構成、言語表現に見られる多少の難解さなどには、申請者の真意をより明確にするために、推敲が望まれる。そうした問題点はあるものの、論文の再提出を要求するまでもなく、本論文は、フリードリヒ研究、あるいは現代ドイツ美術論に貢献大であると判断される。よって本論文を、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。